



原発事故が発生した原発4号機



廃墟と化したプリピャチ市の学校（体育館）



病院（産婦人科）



朽ち果てるにまかせた遊園地



4号機前に立てられた記念碑

抜けるような空の青、
手に届きそうな雲の白、
廃墟を浸蝕するさびの赤……

1986年の事故以来行かなければと
思い続けていた土地。

チェルノブイリにとつこう来た。

そこは、20世紀文明が生み出した沈黙の街。



国際政治アナリスト

後藤 昌代

チェルノブイリの弔鐘

2013年6月、私はウクライナ国チェルノブイリ原子力発電所事故現場を訪れた。原発事故は1986年4月26日、試験運転中に原発4号機で発生し、原子炉がむき出しになるという史上最悪の原発事故となった。事故直後の消火活動などで30人以上が死亡し、原発事故30キロ圏内の住民10万人以上が強制避難させられた。そして事故から27年たった今、4号機は廃炉作業に入っているが、その見通しはたつておらず、原子炉内部も手つかずのままである。また原子炉建屋を覆っている鉄筋コンクリートの石棺の痛みも激しく、このままだと放射能汚染が世界へ拡大する危険性がある。新たな危機の到来である。放射能汚染の拡大を抑えるために、2015年を目標に4号機全体を囲むドーム型の石棺を近くで建設中である。

私は、政府の許可をとり、原発4号機の200メートルまで大接近。放射線レベルが5マイクロシーベルト以上もある場所だ。私はその場所から4号機に向けて、放射能汚染が世界に拡大しないようにと願いを込めながら、手をかざした。するときれいな青空が一層青くなり、周辺にもややもやしていた何かが、一瞬消え去ったように感じた。何ともいえない「すがすがしい思い」になった。その時私は、神の光は放射能をも透し、周辺を浄めるのだと思った。

その後、原発から3kmにある廃墟の町「プリピャチ市（当時5万人）」へ行った。そこはチェルノブイリ原子力発電所で働く人たちのために作られた町だ。そこで私が見た光景は、信じ難いものであった。人が突然消えた町は、時と共に廃墟と化し、建物は徐々に崩壊している。時がとまったように残って

いる学校、病院、遊園地はさびに覆われ、悲惨な状態である。外は自然な森に戻っている姿となり、並木道は隙間なく木々が立ちならんでいる。今では野生動物も生息している。

私は神様から、「地球は神の子でにぎわっているからこそ美しいのだ」と教わったようであった。4号機の前に屹立するモニメント。それは大きな手が4号機を包んでいる。その上に鐘がデザインされている。沈黙の街に鳴り響く弔鐘か、はたまた現代文明の行き先への警鐘か。美しい日本に、このような廃墟の町を作ってはならないと強く感じた。



立ち入り禁止エリアから出る時は、汚染されていないか放射能測定器をくぐらないといけない。無事に通過！

バックの写真：原子炉冷却用の貯水タンク